

11. 別宮地区の祭りについて

安倍華子

- I. はじめに
- II. 別宮地区の神社
- III. 別宮地区の祭礼
- IV. 鳥越村の祭り
- V. 地域の人々にとっての祭りとその変化
- VI. おわりに

I. はじめに

私が一番興味を引かれた点は、浄土真宗への信仰心が強いこの集落で、神社というものがどのような存在であり、そこで行われる祭りは人々にとって、どんな位置付けになるのだろうかということである。つまり、人々にとって祭りとはどのようなものなのだろうか、ということである。別宮地区は全ての集落に神社があり、そこで祭りが行われている。祭りや神社の維持は集落の自治会のもっとも重要な活動であり、万雑に占める割合も大きい。春祭りは、神主を呼んで祝詞を上げるだけ、というように簡単に済ませているが、秋祭りはどの集落でも春祭りより盛大に行われ、集落最大の行事になっている。しかし、この秋祭りは集落によって行っていることが異なっている。その背景としては、集落の過疎化、集落内に子供がいるかどうか、集落や神社が幹線道路に面しているかどうか、万雑のしくみなどの違い、など様々な点があげられる。したがってこの章では、まず別宮地区における神社と祭りの概略を記述し、その後祭りがどのように変化していき、その背景にはどんな事情があったのかということに触れていきたいと思う。そのうえで、この章の一番重要なテーマである地域の人々にとっての祭りとはどのようなものなのかということを見ていきたい。

II. 別宮地区の神社

別宮地区には、すべての集落に神社があるが、ここでは比較的戸数がある集落の例を主に記述していく。杉森地区の場合、神社の掃除は、集落の人たちによる共同作業であり、当番

制で行っている。神社の掃除は、定期的なもののほかに、祭りがあるときに行われるものがある。定期的な掃除である月当番は、けやき板の札が回され、神社当番と呼ばれる。その神社当番が回ってきた人は、月末に神社の掃除をして、木札を次の人に回す。そして、祭りがあるときに行われる年当番というものがあり、これは5軒ずつが掃除を担当する。年当番が回ってきた家は、祭りのときに幕を張ったり、ちょうちんをつける電気を用意したりする。また、普段は畳を起こしているので、お祭りの前に直したり、手洗い水を準備したりもする。しかし、戸数の少ない山村集落では、集落に神社を管理する人手がなく、神社の管理体制ももっと簡略化されているようだ。

祭りの実施については、別宮の場合、主に区長と神社を担当している役員、毎年5軒の家が順番に、祭りの世話をする。杉森では、青・壮年団が実行委員の役割を果たしている。この2つの集落は比較的戸数の多い集落の場合だが、祭りの運営の中心となっていた青年団の団員数が減少したため、壮年団も参加するようになったという地域もある。また、青年団や壮年団という枠組みにとらわれず地域の子供たちや女性たちも参加している。参加の形は、例えばお祭りの後に皆が食べる食事を婦人会が用意したり、神輿は大人たちが担ぐものだった集落が、子供神輿を作って子供たちも神輿を担ぐことに参加するようになったりしている。

このように、どのように神社に建物や祭りに使う旗などを管理しているかや神社の掃除の当番制はどうなっているかという神社の管理体制は、集落の規模によって大きな違いが見られ、祭りの実行委員についても、きちんと実施組織が組まれている集落と青年団だけで維持することができなくなった集落、青年団、壮年団という地区組織自体すら維持することができなくなった集落との間には大きな差がある。

Ⅲ. 別宮地区の祭礼

1. 春祭り

別宮地区では、おおむねどの集落でも春に1回、秋に1回の祭りが行われる。その他に11月に新嘗祭を行うところもある。春祭りが行われる日程は、集落ごとに異なり、4月18日に行うというところが多い。しかし、5月に行うところもあれば、3月に行うところもあり、春祭りが行われる日程にまとまりはない。しかしどの集落にも共通していえることは、春祭りは秋祭りに比べて盛大ではないという点である。

春祭りは、お供えをして、神主に祝詞をあげてもらっただけという形にしているところが多く、祭りに参加するのも集落の代表や、氏子総代のみということにしているところもある。春祭りは農繁期のため特に何もしないということが、秋祭りに比べて簡単に済まされていることの理由のひとつだろう。

2. 秋祭り

秋祭りの日程は、9月15日に行われる場合がほとんどであり、それ以外でも左礫、三ツ瀬、数瀬、阿手の4集落は9月18日というふうに行われる日が集中している。祭りを行うにあたっては、集落の中で様々な役割分担がなされている。ここではまず、別宮地区の祭りの基本的な形であるのぼり旗をあげるという作業に焦点を当てて、集落によってどのような違いが見られるのかということを見ていこうと思う。

秋祭りは神社の柱にのぼり旗をあげるというのが、この別宮地区の祭りの基本的な形である。祭りの際にあげるのぼり旗は、以前は人力であげていた。旗をあげるには手順が決まっていて、その手順どおりにやらないと、巨大な柱に旗をあげることはできない。人力でのぼりを立てるときには、ささえ棒と滑車が2つ使われた。この作業は、1軒の家から最低でも1人が参加する総人夫で行われていた。そしてその総人夫の作業の中で、のぼり旗をあげる手順が次の若い世代へと代々伝えられていったのである。しかし、当て棒で支えて立てることから、ロープの結び方にいたるまで、手順を守り、伝えていくことは非常に大変なことである。旗を立てる方法が若い人たちに受け継がれていくことで、人力で巨大なのぼりを立てることが維持されていたが、人手不足などが原因でその方法が次の世代へ受け継がれるということが困難になってしまったので、人力だけののぼり旗をあげることはできなくなってしまった。具体的な例を挙げると、杉森では昔は、各家から1人ずつ出て、のぼり旗を立てる柱を集会所から神社まで担いでいったが、今は勤めにいっている人の都合がつかないとか、集落人口の高齢化や、半分ほどしか人が集まらないということもあって、クレーンをつかってのぼり旗を立てている。同じように相滝でも今では、クレーンを頼んで柱を立てるようになった。このように比較的戸数の多い集落でものぼり旗を人力であげるという作業は続けていくことができない状況になっている。

また神子清水では、杉森や相滝と同様に、以前は人力でのぼりの柱を立てていた。しかし、今はのぼりを立てることをやめている。神子清水では神社までの道路が狭く、クレーンが入ることができないため、他の地区のように人力の代わりにクレーンを使うという手段をとることはできなかったということも聞いた。神子清水のように神社が幹線道路に面していないという問題がなくても、のぼり旗をあげることをやめてしまった集落もある。

左礫ではかつては赤旗をあげていたが人手がかかるのであげられなくなった。数瀬でも子供や若者もいないので神輿やのぼり旗などは何も出ない。集落の規模によってできることが限られてしまうということは神社の管理体制のところでも述べたが、祭りに関しても同様のことが言えるようだ。また人手がいないということだけではなく、数瀬のように子供や若い人がいないということも、かつては行われていたことがやめられてしまったひとつの原因になっているのかもしれない。

また昔はのぼり旗の長さが長い、短いや、旗をあげるのが早い、遅い、などで杉森、相滝、神子清水の3集落の間にライバル心があった。しかし、今では神子清水では旗を揚げなくなったので、ライバル心も消えた。祭りは集落ごとに行われているが、日程が重なるため、このように昔から競争しあっていたものが今ではライバル心もなくなってしまったというのは単にのぼり旗を立てられなくなったという変化にはとどまらず、集落の人々の気持ちの面でも大きな変化がおこったということがいえるだろう。

次に、秋祭りで行われている集落独自なものを見ていきたいと思う。集落により独自なものとしては、別宮の獅子舞とニワカ、杉森のキリコ、別宮出などの子供神輿、相滝の「作り物」などがある。ここでは別宮、杉森、神子清水、相滝の順に集落ごとに少し詳しく見ていきたい。

①別宮

別宮地区の獅子舞とニワカは、出る年と出ない年があり、不作の年は出さないということになっている。獅子舞が行われるのは、昼から夕方にかけてである。獅子舞は公民館を出発し、別宮の家々を回る。その際、別宮の信号から北と南に集落を二分し、1年交代で獅子舞を担当するというになっている。終点の公民館には、婦人会が用意した料理やお酒があり、家々を回り終わった後、皆で食べたり飲んだりする。獅子舞は青年団によるものだが、子供も参加する。家々を練り歩いてハナをもらうが、ハナは紙に包んで渡されている。ハナの金額は若い人には3000円くらい、老人には1000円くらいを渡している。獅子舞を演じる青年がいないので壮年がやっている。

また、獅子舞を演じる子供は、昔は小学校5年生くらいからやり始めていたが、今はなり手がいいため小学校3年生くらいからやり始めている。あまり幼いと、獅子舞の衣装が重すぎて演じられないということが問題になっている。女の子に関しては、獅子舞の棒振りに参加することはできないのだが、最近お囃子の太鼓や笛には参加するようになった。

ニワカは、仮装行列の一種で、衣装は集落の神社に保管してある。参加者は老人会のメンバーが中心だが、それ以外の老人も参加している。集落であわせて10人程度が参加し、ニワカの行列は獅子舞の後に続く。参加者は三味線をやったり、馬にまたがったりしてそれぞれが好きなことをやっている。また、獅子舞の保存に関しては、昔は青年団が中心となってその役割を果たしてきたが、今は獅子舞保存会というものができた。

②杉森

杉森でキリコが出されるようになったきっかけは、杉森に能登半島から嫁にきた人たちの影響だとのことだ。キリコはもともと能登半島で行われている祭りの要素だが、のぼり旗をあげるだけという祭りではつまらないということでキリコを導入した。キリコの担ぎ手は地元の人だけではなく、集落外の親戚の人などを呼んで手伝ってもらう。キリコが導入された

のは1995年ごろのことで、もともとは、のぼり旗をあげる他は、神主を呼んで祝詞を上げてもらうだけという形式だったのが、キリコを出して集落内を巡回するようになった。そしてそのキリコの後ろに子供神輿が続く。キリコは不幸があった年には自粛される。

また杉森の場合、祭りの費用は万雑から10万円、あとはハナ代からでる。ハナ代は、青・壮年団が担ぐキリコと子供神輿が一軒一軒の家を回り集められる。ハナ代の金額は5千円ほどと決められている。ハナ代の収入は婦人会、子供たち、実行委員会で割られる。

③神子清水

神子清水では、昔は穫れた野菜を担いで区内を回っていたが、1992年からは神輿を担ぐようになった。神輿を担ぎ始めた当初は、30歳未満の青年団のみで担いでいたのだが、現在は、青年団の人数が少なくなったため壮年団の人も合わせて担いでいる。また青・壮年団のほかにも子供会では祭りの笛を吹いたり、婦人会は祭りが終わったあとに皆で食べる食事の世話をしたりする。祭りの費用は杉森と同様にハナ代と万雑から出す。

④相滝

相滝地区は10年程前から子供神輿が出るようになった。この子供神輿は2、3年前から別宮出でも行われている。相滝地区ではその他にも10年ほど前から「作り物」が作られている。作り物とは、発泡スチロールの型のうえに紙を貼って作るオブジェのようなものである。作られるものはその年によって異なり、2年に一度程度の割合で新しいものが作られている。オブジェを考案してから1ヶ月くらいで完成する。子供神輿ができてから、大人たちは「たるみこし」を担いだこともあったが、あまりに素っ気ないので2、3年ごとにこの作り物を担ぐようになったとのことだ。「作り物」は青・壮年団が中心となって作られている。そのほかにも、20年ほど前までやっていた虫送りで使っていた太鼓を、今は秋祭りで使っている。祭りの1週間くらい前から太鼓の練習が行われ、祭りのときは太鼓を叩きながら集落を回る。その際、太鼓の節は集落特有のものである。相滝も杉森と同様に元々はのぼり旗だけで神輿等はなかった。「ふるさと創生」の一環として相滝は子供神輿を作ったとのことだ。

これら杉森、神子清水、相滝、別宮出の各集落は、今までやられてきたことに加えて、というよりもむしろ昔行われていたことが維持できなくなっても、何か別の新しいものがはじめられており、イベントとしては盛んになったということである。しかし、必ずしもすべての集落でこのように新しい変化が付け加えられているわけではない。

新しいことがはじめられた地域がある一方で、祭りが簡略化される一方の地区もある。のぼり旗のところでも述べたように、左礫では、かつては赤旗を揚げていたが、人手が不足するので現在は旗を立てられなくなった。三瀬でも、昔はあわら踊りなどを踊ったことが2、3回あったが今は神主のお参りのみになり、阿手でも、昔は盆踊りや奉納相撲が行われてい

たが、今は人も少なくなったので、神主を呼び、みんなで集まって祝詞を上げてお膳をお供えするのみになった。

このように同じ別宮地区にありながら集落によって祭りの行われ方がかなり違っていることがわかる。比較的最近になって、祭りにこのようなさまざまな行事が行われるようになった背景として、子供がいる集落では教育委員会から助成金が出されるようになったということもあると聞いた。助成金をきっかけにして、子供たちのためにも何かをはじめようというふうに集落の人々の気持ちが動いたということが考えられる。

表1：別宮地区の集落の神社と祭り

集 落	神 社	春 祭 り	秋 祭 り	備 考
別 宮	白 山 別 宮 神 社	4 月 11 日	9 月 15 日	獅子舞、ニワカ
別 宮 出	八 幡 神 社	3 月 20 日 以 降	9 月 15 日	子 供 神 輿
杉 森	白 山 神 社	4 月 15 日	9 月 15 日	キ リ コ
神 子 清 水	春祭り：栗島神社 秋祭り：業師神社	5 月 8 日	9 月 15 日	神 輿
相 滝	八 幡 神 社	4 月 18 日	9 月 15 日	作り物、子供神輿
渡 津	八 幡 神 社	4 月 15 日	9 月 15 日	
左 礫	武 健 社	4 月 18 日	9 月 18 日	
三 ツ 瀬	八 幡 神 社		9 月 18 日	
数 瀬	三 輪 神 社		9 月 18 日	
阿 手	八 幡 神 社	4 月 18 日	9 月 18 日	
五 十 谷	八 幡 神 社		9 月 15 日	
柳 原	八 幡 神 社		9 月 15 日	
野 地	八 幡 神 社		9 月 15 日	

注) 五十谷、野地に関しては『鳥越村史』を参照。現状ではすでに無住化している。

また、祭りの参加者はほとんどが集落の人々だが、集落の最大の行事である秋祭りの時には親戚の人たちが戻ってきたりして祭りに参加するということもある。祭りはそのようにして普段会っていない親戚の人と会うきっかけにもなっているのである。祭りの時の食事は、家ごとにお神酒や魚をそなえたり、笹寿司が作られたりもしている。三ツ瀬では、みょうがのこ、酢の物、ぜんまいを炊いたものが作られ、神前にはおもちを供える。阿手では、神社へ、赤飯、鯛、お神酒が供えられる。しかし、最近ではそういった形にとらわれず、親戚などが集まって、バーベキューをやったりすることもあるようだ。昔のように祭りのときでないと贅沢なものは食べられないということもなくなって、わざわざ特別なものを用意するこ

ともなくなったという面もあるのかもしれない。集落レベルだけではなく、このように家レベルでも祭りに対する変化があるということがわかる。

IV. 鳥越村の祭り

一向一揆祭りは、1989(平成元)年に竹下内閣のふるさと創生資金により開始された。2001年は1万5千人ほどの人が訪れたとのことだ。2002年には14回目を迎え、人出は2万人を超えるのではないかと予想で、混雑緩和対策も考えられている大きなイベントになっている。この一向一揆祭りは、イベント的な要素が強く、宗教色はあまりない。また、祭りが行われる8月13、14日という日程は、お盆に帰ってくる帰省客をターゲットにしたものである。村外の客が多く、ふるさとを知ってもらい、交流を深めることも目的のひとつである。しかしその一方で、一向一揆祭りへの反感もある。役場の人から踊ってくれ、何々の役で何人出してくれ、というようなことを言われるが、やりたい人だけが参加するわけで、別にみんなが関心をもっているわけではない。また祭りの中の役は、集落ごとに割り振られる。鳥越村全体で5月ぐらいから企画委員が選出され、準備を行う。しかし、この一向一揆祭りはあくまでも行政主体の祭りであり、準備に携わるといっても、集落の祭りの準備とは違って、自らが進んでやるというよりは依頼されたからやっているということに過ぎない。この一向一揆祭りと集落の祭りへの人々の意識の違いは、VI.で述べたいと思う。

V. 地域の人々にとっての祭りとその変化

比較的最近になって祭りで行われることが変化したことの背景には、秋祭りのところでも述べたように、子供会に教育委員会から助成金が出るようになったり、ふるさと創生事業がきっかけになったりして、何か新しいことをはじめようということになったといういきさつがある。

では、新しいことをはじめるということではなく、祭りが簡略化されてきたということの背景にはどんな理由があるのだろうか。若者の減少による人手不足ということが最初に浮かんてくるが、それだけではないような気がする。それは集落の人々の祭りに対する気持ちそのものが変化してきているのではないだろうかと感じるからである。その要因として考えられるのは、集落そのものの変化がまずあげられる。人手が減ったこと、中でも祭りの運営の中心的役割を担うはずの若年層が減少しているということが、祭りの維持が難しくなった一

番の要因とも考えられるかもしれない。そのほかにも車の普及による通勤圏の拡大に伴い、勤めに出る人が多くなった結果、集落の行事を維持する体制を変えていかないと、祭りを執り行う地区組織自体の維持すらできなくなってしまうというところまできている。その結果として今、人手がかかるのぼり旗を人力であげるということは不可能になっているし、今まで伝えられてきた、のぼり旗をあげる手順が次の世代に受け継がれていくことも途絶えようとしている。このような祭りの変化に対して地域の人々はどのように受け止めているのだろうか。

秋祭りは集落の最大の行事であり、形を変えても続けていこうという努力は今もなされている。そういった人々の祭りに対する意識、つまり地域の人々にとって祭りはどのようなものなのか。

まずは、行政主体の村レベルの祭りと、集落主体の祭りに対する人々の意識の違いについて考えていきたい。集落レベルの祭りは、Ⅲ.でも述べたように、様々なことが行われ、人手不足や若者の減少といった問題を抱えつつも、人々が祭りを続けていきたい、集落によってはさらに何か別の新しいことをはじめてみたいという人々の明確な意思が感じられる。それに対して一向一揆祭りでは行政の側から依頼されたから祭りに参加するとか、準備に携わるといった感じで、集落の祭りに対する意識とはずいぶんと大きな開きがあるように感じる。人手不足などによって祭りを存続すること自体がかなりの努力を必要とする集落レベルの祭りに対し、一向一揆祭りは訪れる人も多く、人手不足に悩まされて維持することが難しいというような悩みを抱えているわけでもない。しかし、いくらそのように条件に恵まれていても、集落の祭りにはそれには変えられない人々にとって大切なものがあるのだと思う。

第三者の私から見れば、秋祭りは集落最大の行事とはいっても、実際には、ひとつの集落だけでは人手が足りないため、できることも限られてくるし、一向一揆祭りのほうが祭りとして盛り上がっているように見える。しかし一見集落だけのごく小さい祭りのように見えても、人々の気持ちの中では集落の祭りこそが一番盛り上がっている最も大切な祭りなのである。

別宮地区は、集落ごとに神社があるので、祭りが行われる日程が重なっていても複数の集落が一緒に祭りをやることはない。しかしこのまま集落ごとに祭りを続けるのは人手不足ということから考えると難しいことのように思える。それでもあえて人々が集落の祭りにこだわっているのは、家族、集落の結びつきを強める役割を祭りが果たしているからなのである。それに対して一向一揆祭りでは、自治体主導の祭りであるため、そういった結びつきはない。つまり、地域の人々にとって祭りは、自分たち自身が主体となって、自分が生まれ育った集落の祭りを続けていく、子供たちにも伝えていくということが何よりも大切なことなのではないだろうか。

VI. おわりに

別宮地区の各集落で、それぞれが祭りを続けているということはとてもすごいことだと思う。すべての集落においてきちんと維持され、新しいこともどんどんはじめられているというわけではないが、人手不足でできることが限られてきた中でも規模を縮小しながら祭りを続けていこうという人々の気持ちを感じた。

人手不足でできることが限られ、祭りが廃れていくということは、集落の人々の気持ちにどのような変化をもたらすのだろうか。祭りは、ずっと集落の人々の結びつきを強めるための場であり、皆で祭りをを行うという共同作業と、そこから生まれてくる一体感が集落の人々にとって何よりも大切なものなのではないだろうか。集落の祭りが、もし行われなくなってしまったとしたら、人々は集落の中でおたがいの結びつきを強める機会を失ってしまうことになる。だからこそ、そのようなことがないように自分たちの集落の祭りを続けていこうという努力がなされているのではないだろうか。

ここでもう一度人々にとっての祭りというものを見つめなおしてみたいと思う。祭りが変化していった背景には人手不足、若者の減少、ライフスタイルの変化など様々な要因があった。しかし、そういった環境の変化の中でも変わらなかったものは、人々にとって集落の祭りが非常に大切なものであるということである。これからも、人口の減少の問題や若い人たちが都市へと流出していくという問題はなくなるということはないだろう。しかし、どのように環境が変化したとしても、今のように集落の人々が集落の祭りに対して誇りを持ち、続けていきたいという明確な意思を持ち続ける限り、形を変えることはあっても祭りは続けられていくのではないだろうか。